

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 特許公報 (B2)

(11)特許番号

特許第3061197号
(P3061197)

(45)発行日 平成12年7月10日 (2000.7.10)

(24)登録日 平成12年4月28日 (2000.4.28)

(51)Int.Cl.

C 08 F 214/18
B 01 D 61/42
H 01 M 8/02

識別記号

P I

C 08 F 214/18
B 01 D 61/42
H 01 M 8/02

P

請求項の数14(全10頁)

(21)出願番号 特願平7-509452

(86) (22)出願日 平成6年9月14日 (1994.9.14)

(65)公表番号 特表平8-512358

(43)公表日 平成8年12月24日 (1996.12.24)

(86)国際出願番号 PCT/CA94/00497

(87)国際公開番号 WO95/08581

(87)国際公開日 平成7年3月30日 (1995.3.30)

審査請求日 平成8年6月3日 (1996.6.3)

(31)優先権主張番号 124,924

(32)優先日 平成6年9月21日 (1993.9.21)

(33)優先権主張国 米国 (US)

前置審査

(73)特許権者 99999999

バラード パワー システムズ インコ
ーポレイティド
カナダ国, ブリティッシュ コロンビア
ブイ7ピー 3エヌワイ, ノース バ
ンクーバー, ウエスト ファースト ス
トリート 980, ユニット 107

(72)発明者 ウェイ, ジンズー

カナダ国, ブリティッシュ コロンビア
ブイ5シー 2ジー8, バーナビー,
アルバート ストリート 4642

(74)代理人 99999999

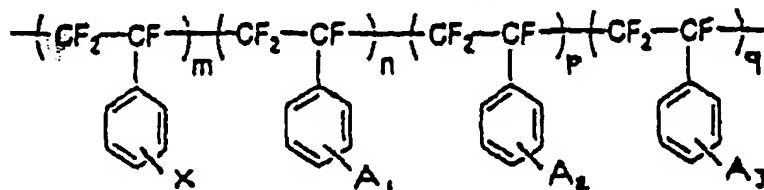
弁理士 石田 敏 (外2名)

審査官 小野寺 慎

最終頁に続く

(54)【発明の名称】 トリフルオロスチレンおよび置換トリフルオロスチレンのコポリマー組成物並びにそれから作られたイオン交換樹脂

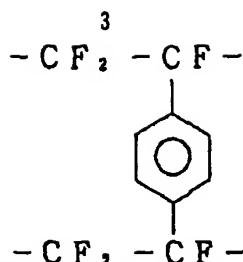
(57)【特許請求の範囲】



(式中、mが0より大きい整数であり、且つ、n、pおよびqのうちの少なくとも1個が0より大きい整数であり;A₁、A₂およびA₃はアルキル、ハロゲン、C_yF_{2y+1} (式中、yは0より大きい整数である。)、O-R (式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。)、CF=CF₂、CN、NO₂およびOHからなる群より選ばれ;そしてXはSO₃H、PO₃H₂、CH₂PO₃H₂、COOH、OSO₃H、OPO₃H₂、OArSO₃H (式中、Arは芳香

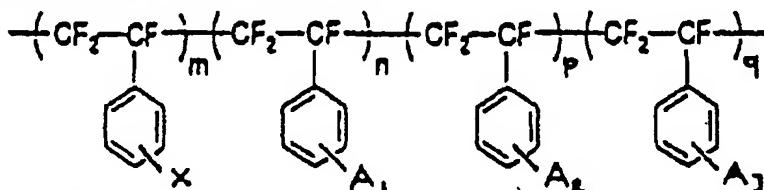
族である。)、NR₃⁺ (式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。)およびCH₂NR₃⁺ (式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。)からなる群より選ばれる。)のポリマー鎖を含むランダムコポリマー。

【請求項2】前記ポリマー鎖同士を結合する



からなる架橋構造を有する、請求の範囲1記載のランダムコポリマー。

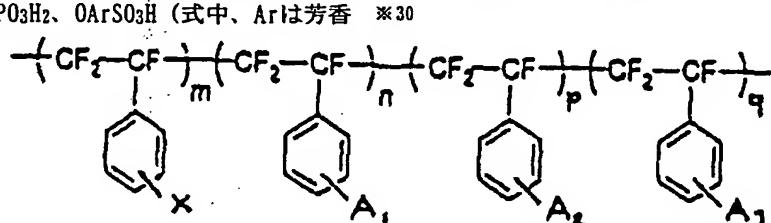
【請求項3】 m が 0 より大きい整数であり、 n が 0 より*10



(式中、 m が 0 より大きい整数であり、且つ、 n 、 p および q のうちの少なくとも 1 個が 0 より大きい整数であり； A_1 、 A_2 および A_3 はアルキル、ハロゲン、 C_yF_{2y+1} (式中、 y は 0 より大きい整数である。)、 $O-R$ (式中、 R はアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。)、 $CF=CF_2$ 、 CN 、 NO_2 、 OH 、 SO_3H 、 PO_3H_2 、 $CH_2PO_3H_2$ 、 $COOH$ 、 OSO_3H 、 OPO_3H_2 、 $OArSO_3H$ (式中、 Ar は芳香族である。)、 NR_3^+ (式中、 R はアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。) および $CH_2NR_3^+$ (式中、 R はアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。) からなる群より選ばれ；ここで、 A_1 、 A_2 および A_3 のうちの少なくとも 1 個は SO_3H 、 PO_3H_2 、 $CH_2PO_3H_2$ 、 $COOH$ 、 OSO_3H 、 OPO_3H_2 、 $OArSO_3H$ (式中、 Ar は芳香族である。)、 NR_3^+ (式中、 R はアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。) および $CH_2NR_3^+$ (式中、 R はアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。) からなる群より選ばれ；そして A_1 、 A_2 および A_3 が X と異なる。) のポリマー鎖を含むランダムコポリマー。*30

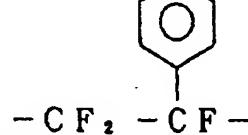
20 *族である。)、 NR_3^+ (式中、 R はアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。) および $CH_2NR_3^+$ (式中、 R はアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。) からなる群より選ばれ；そして X は SO_3H 、 PO_3H_2 、 $CH_2PO_3H_2$ 、 $COOH$ 、 OSO_3H 、 OPO_3H_2 、 $OArSO_3H$ (式中、 Ar は芳香族である。)、 NR_3^+ (式中、 R はアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。) および $CH_2NR_3^+$ (式中、 R はアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。) からなる群より選ばれ；そして A_1 、 A_2 および A_3 が X と異なる。) のポリマー鎖を含むランダムコポリマー。

【請求項7】 下記式、



(式中、 m が 0 より大きい整数であり、且つ、 n 、 p および q のうちの少なくとも 1 個が 0 より大きい整数であり； A_1 、 A_2 および A_3 はアルキル、ハロゲン、 C_yF_{2y+1} (式中、 y は 0 より大きい整数である。)、 $O-R$ (式中、 R はアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。)、 $CF=CF_2$ 、 CN 、 NO_2 および OH からなる群より選ばれ；そして X は SO_3H 、 PO_3H_2 、 $CH_2PO_3H_2$ 、 $COOH$ 、 OSO_3H 、 OPO_3H_2 、 $OArSO_3H$ (式中、 Ar は芳香族である。)、 NR_3^+ (式中、 R はアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。) および $CH_2NR_3^+$ (式中、 R はアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。) からなる群より選ばれ；そして A_1 、 A_2 および A_3 が X と異なる。) のポリマー鎖から本質的になるランダムコポリマー。

40 【請求項8】 前記ポリマー鎖同士を結合する

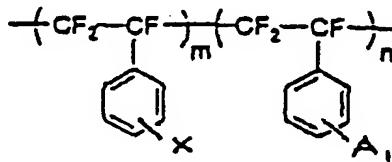


からなる架橋構造を有する、請求の範囲7記載のランダムコポリマー。

【請求項9】 m が 0 より大きい整数であり、 n が 0 より大きい整数であり且つ p および q が両方とも 0 であり、 A_1 がフッ素および CF_3 からなる群より選ばれ、そして X が SO_3H である請求の範囲7記載のランダムコポリマーを

含むポリマー膜。

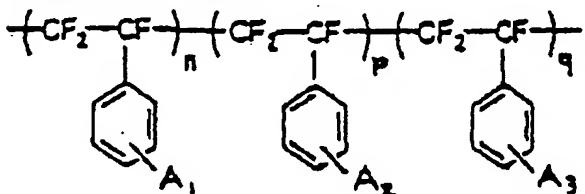
【請求項10】請求の範囲9記載のポリマー膜を含むイオン交換膜。



(式中、mが0より大きい整数であり、且つ、n、pおよびqのうちの少なくとも1個が0より大きい整数であり；A₁、A₂およびA₃はアルキル、ハロゲン、C_yF_{2y+1}（式中、yは0より大きい整数である。）、O-R（式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。）、CF=CF₂、CN、NO₂、OH、SO₃H、PO₃H₂、CH₂PO₃H₂、COOH、OSO₃H、OPO₃H₂、OArSO₃H

（式中、Arは芳香族である。）、NR₃⁺（式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。）およびCH₂NR₃⁺（式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。）からなる群より選ばれ；ここで、A₁、A₂およびA₃のうちの少なくとも1個はSO₃H、PO₃H₂、CH₂PO₃H₂、COOH、OSO₃H、OPO₃H₂、OArSO₃H（式中、Arは芳香族である。）、NR₃⁺（式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。）およびCH₂NR₃⁺（式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。）からなる群より選ばれ；そしてXはSO₃H、PO₃H₂、CH₂PO₃H₂、COOH、OSO₃H、OPO₃H₂、OArSO₃H（式中、Arは芳香族である。）、NR₃⁺（式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。）およびCH₂NR₃⁺（式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。）からなる群より選ばれ；そしてA₁、A₂およびA₃がXと異なる。）のポリマー鎖から本質的になるランダムコポリマー。

【請求項13】下記式。



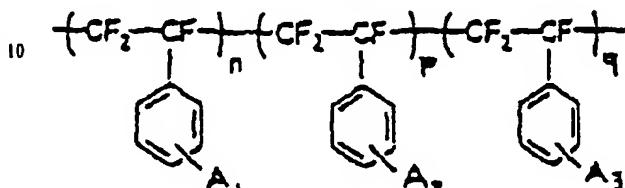
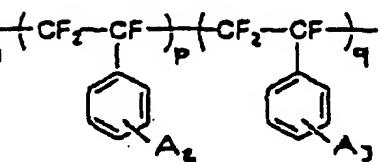
（式中、n、pおよびqのうちの少なくとも1個が0より大きい整数であり；そしてA₁、A₂およびA₃はO-R

（式中、RはC_yF_{2y+1}およびC_yF_{2y+1}（式中、yは3より大きい整数である。）並びにアリールからなる群より選ばれる。）CF=CF₂、CN、NO₂およびOHからなる群より選ばれる。）のポリマー鎖を含むランダムコポリマー。

【請求項14】下記式。

* 【請求項11】請求の範囲10記載のイオン交換膜を含む電気化学燃料電池。

【請求項12】下記式。



（式中、n、pおよびqのうちの少なくとも1個が0より大きい整数であり；そしてA₁、A₂およびA₃はO-R（式中、RはC_yF_{2y+1}およびC_yF_{2y+1}（式中、yは3より大きい整数である。）並びにアリールからなる群より選ばれる。）CF=CF₂、CN、NO₂およびOHからなる群より選ばれる。）のポリマー鎖から本質的になるランダムコポリマー。

【発明の詳細な説明】

発明の分野

本発明は、トリフルオロスチレンベースのポリマー組成物に関する。より詳細には、本発明はα、α、β-トリフルオロスチレンと様々な置換α、α、β-トリフルオロスチレンとのコポリマーから得られたポリマー組成物に関する。これらの組成物は、特に、電気化学用途、例えば、電気化学燃料電池において、固体ポリマー電解質としての使用に適切である。

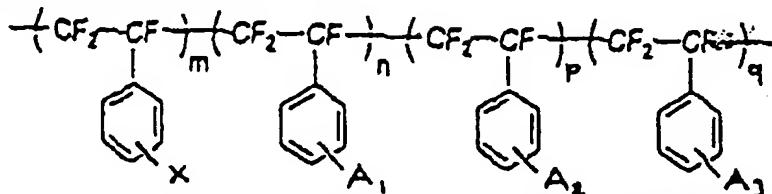
発明の背景

燃料電池用ポリマー電解質としての用途および他の電気化学用途のために、様々な膜が開発されてきた。これらのポリマーは、通常、過フッ素化脂肪族組成物であり、例えば、米国特許第3,282,875号および第4,330,654号に記載されているものであった。これらの組成物は非常に高価な膜であり、そして第875号特許の場合、高電流密度では低い燃料電池性能を示す傾向がある。別に、一連のポリ芳香族ベースの系は調べられており、例えば、米国特許第3,528,858号および第3,226,361号に記載されている。これらの材料は、低い耐薬品性および機械特性に悩まされ、そのことは、燃料電池の用途でのその使用を制限する傾向がある。他の材料の調査は、米国特許第3,341,366号および日本国特開昭第53-26884号に記載のように、モノマー単位α、α、β-トリフルオロスチレンを含むポリマーの研究であった。しかし、これらの組成物は第366号特許の場合に、低い機械特性に、そして日本国公開公報の場合には、非常に低いポリマー収率に悩まされる。

50 それ故、本発明の目的は、高い収率で、良好な化学お

より機械特性を有する低コストのイオン交換ポリマー膜を製造することである。

本発明の目的は、また、燃料電池のような電気化学用途を含めた多くの用途における使用に適切なイオン交換*



(式中、m、n、pおよびqのうちの少なくとも2個は0より大きい整数であり；A₁、A₂およびA₃はアルキル、ハロゲン、C_yF_{2y+1}（式中、yは0より大きい整数である。）、O-R（式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。）、CF=CF₂、CN、NO₂およびOHからなる群より選ばれ；そして、XはSO₃H、PO₃H₂、CH₂PO₃H₂、COOH、OSO₃H、OPO₃H₂、OArSO₃H（式中、Arは芳香族である。）、NR₃⁺（式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。）およびCH₂NR₃⁺（式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。）からなる群より選ばれる。）を含むポリマー組成物により達成される。A₁、A₂、A₃およびX置換基はオルト、メタおよび/またはパラ位にあってよい。このコポリマーは二元、三元または四元であってよい。

A₁、A₂およびA₃置換基は既知の手段により更に転化されることができ、例えば、CNを加水分解してCOOHを形成し、または、一般的な還元剤（例えば、ラネニッケル）により還元して第一級アミンを形成し、そこで、A₁、A₂およびA₃置換基は「X」タイプのイオン交換部分に更に転化されてもよい。得られたポリマー組成物は、このように、1種以上のイオン交換部分を含んでよく、そしてカチオンおよびアニオン交換部分を含んでもよい。

ポリマー組成物は、また、本質的に上記の化学単位からなることもできる。

得られるポリマー膜の膨潤を抑制するべきである用途では、隣接しているポリマーの少なくとも一定量は好ましくは架橋されている。

mおよびnが0より大きい整数であり、pおよびqが両方とも0であり、A₁がフッ素またはCF₃であり、そしてXがSO₃Hであるポリマー組成物は、適切に膜に成形され、そして、電気化学燃料電池において、好ましくはイオン交換膜、最も好ましくはカチオン交換膜として用いられる。

図面の簡単な説明

図1は、Nafion 117 (DuPontの商品名) カチオン交換膜、Dow実験用カチオン交換膜およびスルホン化α、β-トリフルオロスチレンコポリマー膜、それぞれ

*ポリマー膜を製造することである。

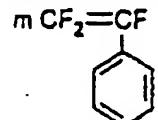
発明の要旨

上記および他の目的は、

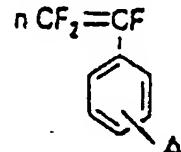
を用いた電気化学燃料電池において、電流密度の関数とした電圧のプロットである。

好ましい態様の詳細な説明

本発明のポリマー組成物は、次の化学式



（式中、mは0より大きい整数である。）を有するα、 α 、 β -トリフルオロスチレンと、次の化学式



（式中、nは0より大きい整数であり、そしてAはアルキル、ハロゲン、C_yF_{2y+1}（式中、yは0より大きい整数である。）、O-R（式中、Rはアルキル、ペルフルオロアルキルおよびアリールからなる群より選ばれる。）、CF=CF₂、CN、NO₂およびOHからなる群より選ばれる。）を有する、置換 α 、 α 、 β -トリフルオロスチレンからなる群より選ばれた他のモノマーとの混合物を反応させて、基礎ポリマーを形成させることにより製造される。「A」置換基はオルト、メタおよび/またはパラ位にあってよい。

上記のモノマーはラジカル開始剤および乳化剤を含む水性媒質中で、約35~95℃の範囲の温度で、約24~74時間、不活性雰囲気下で混合される。基礎コポリマーは、スルホン化され、または、本発明の更なる態様により、基礎ポリマーは、燐酸化され、カルボキシル化され、第四級アミノアルキル化されまたはクロロメチル化され、そして更に-CH₂PO₃H₂、-CH₂NR₃⁺（式中、Rはアルキルである。）または-CH₂NAr₃⁺（式中、Arは芳香族（アレーン）である。）を生じるよう更に変性されて、カチオンまたはアニオン交換膜を提供することができる。更に、芳香族部分はヒドロキシル基を含んでよく、それは、既存の方法により、ポリマー上に-OSO₃Hおよび-PO₃H₂カチオン交換サイトを生じるように容易に変性されうる。

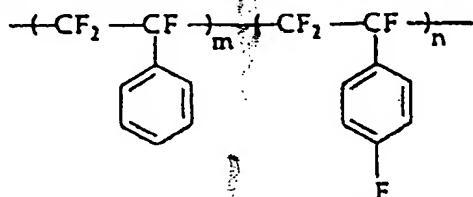
カチオン交換膜を製造するために用いられる典型的な

スルホン化反応において、コポリマーは適切な溶剤中に溶解され、そしてその後、クロロスルホン酸または三酸化硫黄のルイス酸塩基錯体のようなスルホン化剤と反応される。このような反応のための溶剤は塩素化脂肪族炭化水素、例えば、ジクロロエタン、テトラクロロエチレンおよびクロロホルムからなる群より選ばれることができる。コポリマー溶液は、スルホン化剤を含む溶液の添加の前に完全に均質にされる。その後、反応は約18°C±5°Cから溶剤の沸点までの範囲の温度で行われる。コポリマーの充分な官能化を確保するために、反応は、約10～約4時間またはそれ以上の時間続けられる。

このように調製されたコポリマーは、 α 、 α 、 β -トリフルオロロスチレン(TFS)単独から形成されたホモポリマー材料と比較して、良好な特性、例えば、高い熱安定性、耐薬品性および良好な機械特性、例えば、引張強さを有する。

次の例は例示の目的であり、そして本発明を制限することが意図されない。例1～9は基礎コポリマーの合成を記載している。例10～21は例1～9において合成された基礎コポリマーのスルホン化を記載している。例22は、電気化学燃料電池において、本発明のスルホン化コポリマーから形成された一種のイオン交換コポリマー膜で行った試験結果を示す。

例1～4は次の基礎コポリマーの調製を示す。



(式中、mおよびnは0より大きい整数である。)

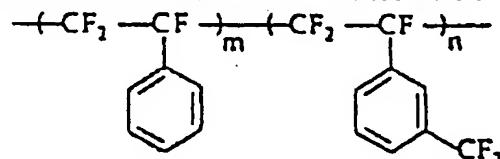
例1

352mLの脱イオン水および7.05gのドデシルアミンヒドロクロリドを、メカニカルスターーおよび還流凝縮器を具備した500mL 3つ口丸底フラスコに入れた。反応系にN₂を約1/2時間通過させてO₂を除去した。44.4g (0.28モル、80%) の α 、 α 、 β -トリフルオロロスチレン(TFS)および12.4g (0.07モル、20%) のp-フルオロ- α 、 α 、 β -トリフルオロロスチレン(p-T-TFS)をフラスコに入れた。得られたエマルジョンを攪拌し、そして50°Cに加熱し、その後、0.53gの過硫酸カリウムを反応系に加えて48時間反応させた。反応の終了時に、ポリマー-エマルジョンを、水性NaOH溶液(NaOH/ドデシルアミンヒドロクロリドのモル比が5:1)を含む2Lビーカーに注ぎ、そして1時間沸騰させて乳化剤を破壊した。混合物を濾過し、そしてコポリマーを、メタノールを含む別のビーカーに移し、そして2時間攪拌した。濾過後に、コポリマーをトルエン中に再溶解させ、そしてメタノール中でゆっくりと沈殿させた。白色の繊維状のコポリマーが得られ、そしてそれを真空炉内で70°C、30トルで数時間乾燥した。共重合収量は20.1g (62.3%) であり、コポリマーの固有粘度([η])は1.12dL/gであった。

例4

例3と同一の手順を用いたが、反応は48時間の代わりに72時間行われた。収量は18.5g (57.5%) であり、コポリマーの[η]は1.12dL/gであった。

例5～8は次の基礎コポリマーの調製を示す。



例5

例1と同一の手順を用いたが、237mLの脱イオン水、4.73gのドデシルアミンヒドロクロリド、29.8gのTFS (80%)、10.7gのm-CF₃-TFS (20%) および0.35gの過硫酸カリウムを共重合において用いた。収量は29.7g (73.4%) であり、そしてコポリマーの[η]は1.16dL/gであった。

例6

例3と同一の手順を用いたが、25.2gのTFS (80%)、9.0gのm-CF₃-TFS (20%) を用い、そして反応を48時間の代わりに72時間行った。収量は19.0g (55.5%) で

で数時間乾燥した。共重合収量は43.3g (76.2%) であり、コポリマーの固有粘度([η])は30°Cでトルエン中で測定して1.58dL/gであった。

例2

例1と同一の手順を用いたが、200mLの脱イオン水、4.00gのドデシルアミンヒドロクロリド、25.2gのTFS (80%) および7.04gのp-F-TFS (20%) および0.30gの過硫酸カリウムを共重合において用いた。収量は21.8g (67.6%) であり、コポリマーの[η]は1.56dL/gであった。

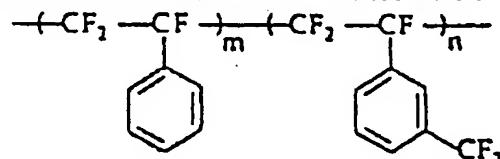
例3

200mLの脱イオン水および4.0gのドデシルアミンヒドロクロリドを、メカニカルスターーおよび還流凝縮器を具備した500mL 3つ口丸底フラスコに入れた。反応系にN₂を約1/2時間通過させてO₂を除去した。25.2g (0.16モル、80%) のTFS、7.04g (0.04モル、20%) のp-F-TFS および0.30gの過硫酸カリウムを反応フラスコに入れた。得られたエマルジョンを攪拌し、そして48時間50°Cに加熱した。反応の終了時に、ポリマー-エマルジョンを、水性NaOH溶液(NaOH/ドデシルアミンヒドロクロリドのモル比が5:1)を含む2Lビーカーに注ぎ、そして1時間沸騰させて乳化剤を破壊した。混合物を濾過し、そしてコポリマーを、メタノールを含む別のビーカーに移し、そして2時間攪拌した。濾過後に、コポリマーをトルエン中に再溶解させ、そしてメタノール中でゆっくりと沈殿させた。白色の繊維状のコポリマーが得られ、そしてそれを真空炉内で70°C、30トルで数時間乾燥した。共重合収量は20.1g (62.3%) であり、コポリマーの固有粘度([η])は1.12dL/gであった。

例4

例3と同一の手順を用いたが、反応は48時間の代わりに72時間行われた。収量は18.5g (57.5%) であり、コポリマーの[η]は1.12dL/gであった。

例5～8は次の基礎コポリマーの調製を示す。



例5

例1と同一の手順を用いたが、237mLの脱イオン水、4.73gのドデシルアミンヒドロクロリド、29.8gのTFS (80%)、10.7gのm-CF₃-TFS (20%) および0.35gの過硫酸カリウムを共重合において用いた。収量は29.7g (73.4%) であり、そしてコポリマーの[η]は1.16dL/gであった。

例6

例3と同一の手順を用いたが、25.2gのTFS (80%)、9.0gのm-CF₃-TFS (20%) を用い、そして反応を48時間の代わりに72時間行った。収量は19.0g (55.5%) で

11

あり、そしてコポリマーの $[\eta]$ は 1.07dL/g であった。

例7

例1と同一の手順を用いたが、686mLの脱イオン水、12.7gのドデシルアミンヒドロクロリド、80.0gのTFS (80%)、28.7gのm-CF₃-TFS (20%) および0.95gの過硫酸カリウムを用い、そして重合を72時間行った。収量は91.6g (84.3%) であり、そしてコポリマーの $[\eta]$ は 1.28dL/g であった。このコポリマーの¹⁹F-NMR分析を、CDCl₃を溶剤として用いてVARIAN XL-300 NMRで行った。結果は、得られたコポリマーが27%のm-CF₃-TFS モノマー単位を含むことを示した。

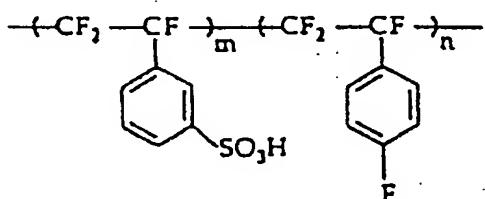
例8

例1と同一の手順を用いたが、725mLの脱イオン水、14.5gのドデシルアミンヒドロクロリド、79.9gのTFS (70%)、48.9gのm-CF₃-TFS (30%) および1.09gの過硫酸カリウムを用い、そして重合を72時間行った。収量は105.1g (81.6%) であり、そしてコポリマーの $[\eta]$ は 1.37dL/g であった。このコポリマーの¹⁹F-NMR分析は、コポリマーが38%のm-CF₃-TFS モノマー単位を含むことを示した。

例9

例1と同一の手順を用いたが、189mLの脱イオン水、3.77gのドデシルアミンヒドロクロリド、17.8gのTFS (60%)、17.0gのm-CF₃-TFS (40%) および0.28gの過硫酸カリウムを用い、そして重合を72時間行った。収量は28.0g (80.5%) であり、そしてコポリマーの $[\eta]$ は 1.67dL/g であった。このコポリマー中のm-CF₃-TFS モノマー単位含有率は、¹⁹F-NMR分析で測定して45%であった。

例10および11は次のスルホン化コポリマーの調製を示す。



例10

50mLのクロロホルム中の6.17mLのClSO₃Hの溶液を、40.0mLのクロロホルム中の7.5gのTFS-p-F-TFSコポリマー (20% p-F-TFS) の溶液を含む3つロフラスコに加えた。ClSO₃H/モノマー単位のモル比は2:1であった。反応は60°Cで4時間行われた。その後、反応混合物を、5Lの脱イオンに移し、1時間沸騰させ、濾過し、そして生成物を50°Cおよび30トルで真空炉内で乾燥した。収量は8.8gであり、スルホン化コポリマーの当量および水分含有率はそれぞれ586g/モルおよび40%であった。

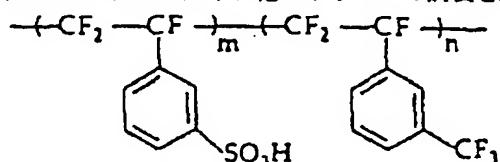
例11

滴下漏斗、熱電対およびメカニカルスターを具備した3つロフラスコ中で、7.5gのTFS-p-F-TFSコポリマー (20% p-F-TFS) の溶液を含む3つロフラスコに加えた。ClSO₃H/モノマー単位のモル比は2:1であった。反応は60°Cで4時間行われた。その後、反応混合物を、5Lの脱イオンに移し、1時間沸騰させ、濾過し、そして生成物を50°Cおよび30トルで真空炉内で乾燥した。収量は8.8gであり、スルホン化コポリマーの当量および水分含有率はそれぞれ586g/モルおよび40%であった。

12

リマー (20% p-F-TFS) を169mLのクロロホルム中に溶解させた。10.12mLのO=P(0Et)₃ および9.86mLのSO₃を49.8mLのクロロホルムに0°Cで加えることにより、SO₃/O=P(0Et)₃ 錯体を製造した。SO₃/O=P(0Et)₃ のモル比は4:1であり、そしてSO₃/モノマー単位のモル比は5.3:1であった。この錯体を素早く滴下漏斗に移し、そして10分間にわたって混合物に加えた。反応体を60°Cで4時間攪拌した。例10に記載と同一の処理手順を用いた。収量は11.4gであり、スルホン化コポリマーの当量および水分含有率はそれぞれ350g/モルおよび260%であった。

例12～21は次のスルホン化コポリマーの調製を示す。



例12

例11と同一の手順を用いたが、19.4mLのクロロホルム中、3.97mLのO=P(0Et)₃ および3.77mLのSO₃を含むSO₃/O=P(0Et)₃ 錯体を反応系に急速に加え、SO₃/モノマー単位のモル比は2:1であり、そして反応は室温で4時間行われた。収量は8.6gであり、そしてスルホン化コポリマーの当量および水分含有率はそれぞれ871g/モルおよび15%であった。

例13

50mLのクロロホルム中の28.5mLのClSO₃Hの溶液を、37.8mLのクロロホルム中に7.5gのTFS-m-CF₃-TFSコポリマー (20% m-CF₃-TFS) を含む、攪拌されている溶液に、60°Cで、5分間にわたって加えた。ClSO₃H/モノマー単位のモル比は9.8:1であり、そして反応は60°Cで3時間行われた。例10に記載したのと同様の処理を行った。収量は9.5gであり、そしてスルホン化コポリマーの当量および水分含有率はそれぞれ350g/モルおよび776%であった。

例14

7.5gのTFS-m-TFS (20% m-CF₃-TFS) コポリマーを室温で160mLのクロロホルム中に溶解させた。63.9mLのクロロホルム中に13mLのO=P(0Et)₃ および12.4mLのSO₃を含むSO₃/O=P(0Et)₃ 錯体を0°Cで製造し、そして反応系に20秒間にわたって加えた。SO₃/O=P(0Et)₃ のモル比は4:1であり、そしてSO₃/モノマー単位のモル比は7:1であった。反応は室温において4時間行われた。例10に記載したのと同一の処理を行った。収量は12.8gであり、そしてスルホン化コポリマーの当量および水分含有率はそれぞれ379g/モルおよび266%であった。

例15

例14と同一の手順を用いたが、54.8mLのクロロホルム中に11.1mLのO=P(0Et)₃ および10.7mLのSO₃を加え

13

ことにより $\text{SO}_3/\text{O}=\text{P}(\text{OEt})_3$ 錯体を 0°C で製造した ($\text{SO}_3/\text{モノマー単位のモル比は} 6:1$ であった。)。収量は 9.9g であり、そしてスルホン化コポリマーの当量および水分含有率はそれぞれ 399g/モルおよび 151% であった。

例16

例14と同一の手順を用いたが、49.8mLのクロロホルム中に 10.1mL の $\text{O}=\text{P}(\text{OEt})_3$ および 9.9mL の SO_3 を加えることにより $\text{SO}_3/\text{O}=\text{P}(\text{OEt})_3$ 錯体を 0°C で製造した ($\text{SO}_3/\text{モノマー単位のモル比は} 5.6:1$ であった。)。スルホン化コポリマーの当量および水分含有率はそれぞれ 437g/モルおよび 156% であった。

例17

例14と同一の手順を用いたが、38.7mLのクロロホルム中に 7.9mL の $\text{O}=\text{P}(\text{OEt})_3$ および 7.5mL の SO_3 を加えることにより $\text{SO}_3/\text{O}=\text{P}(\text{OEt})_3$ 錯体を 0°C で製造した ($\text{SO}_3/\text{モノマー単位のモル比は} 4.2:1$ であった。)。収量は 12.3g であり、そしてスルホン化コポリマーの当量および水分含有率はそれぞれ 463g/モルおよび 81% であった。

例18

例14と同一の手順を用いたが、29.0mLのクロロホルム中に 6.0mL の $\text{O}=\text{P}(\text{OEt})_3$ および 5.7mL の SO_3 を加えることにより $\text{SO}_3/\text{O}=\text{P}(\text{OEt})_3$ 錯体を 0°C で製造した ($\text{SO}_3/\text{モノマー単位のモル比は} 3.2:1$ であった。)。収量は 9.7g であり、そしてスルホン化コポリマーの当量および水分含有率はそれぞれ 594g/モルおよび 42% であった。

例19

例14と同一の手順を用いたが、24.2mLのクロロホルム中に 5.0mL の $\text{O}=\text{P}(\text{OEt})_3$ および 4.7mL の SO_3 を加えることにより $\text{SO}_3/\text{O}=\text{P}(\text{OEt})_3$ 錯体を 0°C で製造した

14

($\text{SO}_3/\text{モノマー単位のモル比は} 2.6:1$ であった。)。収量は 9.1g であり、そしてスルホン化コポリマーの当量および水分含有率はそれぞれ 825g/モルおよび 21% であった。

例20

例14と同一の手順を用いたが、19.4mLのクロロホルム中に 4.0mL の $\text{O}=\text{P}(\text{OEt})_3$ および 3.8mL の SO_3 を加えることにより $\text{SO}_3/\text{O}=\text{P}(\text{OEt})_3$ 錯体を 0°C で製造した ($\text{SO}_3/\text{モノマー単位のモル比は} 2.1:1$ であった。)。収量は 8.5g であり、そしてスルホン化コポリマーの当量および水分含有率はそれぞれ 915g/モルおよび 13% であった。

例21

例14と同一の手順を用いたが、9.7mLのクロロホルム中に 2.0mL の $\text{O}=\text{P}(\text{OEt})_3$ および 1.9mL の SO_3 を加えることにより $\text{SO}_3/\text{O}=\text{P}(\text{OEt})_3$ 錯体を 0°C で製造した ($\text{SO}_3/\text{モノマー単位のモル比は} 1.1:1$ であった。)。収量は 9.1g であり、そしてスルホン化コポリマーの当量および水分含有率はそれぞれ 31,000g/モルおよび 2% であった。

例22

スルホン化 $\text{TFS}-\text{m}-\text{CF}_3-\text{TFS}$ コポリマー膜の 3 種のシートの各々の両側の主要表面を 2 枚のカーボン紙電極に、室温で 10,000 ポンドの圧力で結合した。これらの膜/電極アセンブリー (MEA) を Ballard Mark IV 単一セル燃料電池で試験した (米国特許第 4,988,583 号; 第 5,108,849 号; 第 5,170,124 号; 第 5,176,966 号および第 5,200,278 号参照、これら全てを参照により実体部分を取り入れる。)。試験した 3 種のスルホン化コポリマー膜 (BAM3G01, BAM3G02 および BAM3G03) の結果を下記の表 1 に示す。

表1

Ballard Mark IV 燃料電池におけるTFS- m -CF₃-TFS コポリマー膜の性能

アンペア/ ft^2

	電池電圧(V)		
	BAM3G01	BAM3G02	BAM3G03
100	0.827	0.821	0.818
200	0.783	0.775	0.766
300	0.739	0.736	0.719
400	0.711	0.697	0.669
500	0.670	0.647	0.613
600	0.638	0.612	0.533
700	0.603	0.575	0.461
800	0.573	0.540	0.255
900	0.533	0.498	0.165
1000	0.494	0.438	-
1100	0.452	0.374	-
1200	0.393	0.355	-
1300	0.263	-	-

試験した3種のスルホン化コポリマー膜は次の特性を有した。

BAM3G01:当量427;水含有率:145%;MEAの寿命:500アンペア/ ft^2 で329時間

BAM3G02:当量447;水含有率:104%;MEAの寿命:500アンペア/ ft^2 で4061時間(ガスケットの付いたMEA)

BAM3G03:当量470;水含有率:91%;MEAの寿命:500アンペア/ ft^2 で318時間

3種のスルホン化コポリマー膜が試験される燃料電池に次の操作条件を用いた。

温度=70°C、

空気およびH₂反応体の両方の反応体インレット圧力24ps

i 理論量比:2.0空気および1.5H₂

図1は、それぞれDuPont Nafion 117カチオンイオン交換膜、DuPont実験用カチオン交換膜(XUS 13204.10の商品名)および上記の例22のBAM3G01のスルホン化 α , α , β -トリフルオロスチレンコポリマー膜を用いた電気化学燃料電池における電流密度に対する電圧のプロットである。図1に示すように、スルホン化 α , α , β -

40

50

トリフルオロスチレンコポリマー膜は800アンペア/ ft^2 より高い電流密度で、Dow膜よりも高い電池の電圧を達成した。Dow膜は、全ての電流密度でNafion 117膜よりも高い電圧を達成した。更に、本発明のスルホン化コポリマーは、電気化学燃料電池試験スタンドで、4000時間を超える長い寿命を有する。

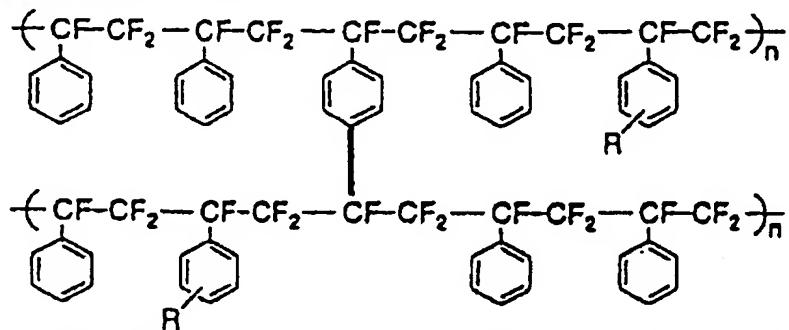
α , α , β -トリフルオロスチレン(TFS)および m -CF₃- α , α , β -トリフルオロスチレン(m -CF₃-TFS)から形成されたコポリマーは80%を越える収率が得られた。

本発明のスルホン化コポリマーは次の更なる利点を有する。

- アレーン基の存在のために、広く様々な異なるイオン交換官能基を導入する融通性がある。
- 同一の基礎ポリマーから出発して、異なる当量の多くの一連の膜を製造することができる。
- これらのコポリマーは様々な普通溶剤、例えば、N,N-ジメチルホルムアミド、ジメチルスルホキシドおよびN-メチルピロリドンに可溶性であるという点で加工性がある。

17

4. 物性および機械特性を改良するために、ジビニルベンゼンゼンポリスチレンを調製するときに用いられるような従来の技術を用いて架橋を導入することができる。*



(式中、nは0より大きい整数であり、そしてRはフッ素またはCF₃である。)

電気化学燃料電池のためのイオン交換膜として、ここに記載したスルホン化コポリマー膜の利用性に加えて、次の更なる利用性も考えられる。

1. プロトン交換膜をベースとした水電気分解、これは水素／酸素電気化学燃料電池に用いられる化学反応の逆化学反応を行う。
2. クロルアルカリ電気分解、これは典型的には、副生成物として水素とともに塩素および水酸化ナトリウムを製造するためのブライン溶液の電気分解を行う。
3. スルホン化コポリマー膜の化学不活性および高い導電性のために、従来の電池における電極セパレーター。
4. イオン選択性電極、特にCa²⁺、Na⁺、K⁺等の特定のイオンの電位差測定のために用いられるもの。イオン交換膜の導電性が湿度とともに変化するので、これらのコポリマーは湿度センサーのためのセンサー材料としても用いられることができるであろう。
5. イオン交換クロマトグラフィーによる分離のためのイオン交換材料。典型的なこの用途は水の脱イオン化および脱塩（例えば、重金属で汚染された水の精製）、イオン分離（例えば、希土類金属イオン、超ウラン元素）および阻害イオン種の除去である。
6. 分析用予備濃縮技術（ドナン透析（Donnan Dialysis））において用いられるイオン交換膜。この技術は、

* 本発明に含まれるタイプの架橋ポリマーは次の化学式を有する。

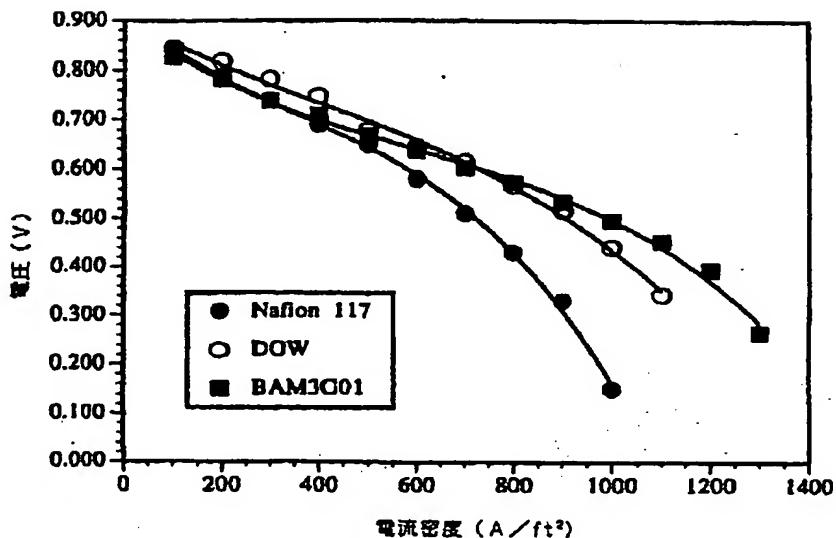
18

典型的には、分析されるべき薄膜イオン種を濃縮するための分析化学処理において用いられる。

7. 電気透析におけるイオン交換膜。ここで、膜は電流の電力下で、イオン溶液の成分を分離するために用いられる。電気分解用途は、工業規模の塩水の脱塩、ボイラーフィードのマークアップおよび化学処理水の調製、糖溶液の脱灰、柑橘類ジュースの脱酸性化、アミノ酸の分離等を含む。
8. 透析用途の膜。ここで、溶質は、濃度勾配により、膜の片側（フィード側）から反対側に拡散する。溶質間の分離は、分子サイズの違いから生じる膜を横断する拡散速度の違いの結果として行われる。このような用途は、血液透析（人工腎臓）およびビールからのアルコールの除去を含む。
9. ガス分離（ガス透過）および浸透気化（液体浸透）技術における膜。
10. 水分離、次に排水溶液から酸および塩基の回収において用いられる両性膜。

本発明の特定の要素、態様および用途を示したが、勿論、変更は特に上記の教示から当業者によりなされることができるので、本発明はそれに限定されないと理解されるべきである。それ故、本発明の範囲に当たる特徴を取り入れたこのような変更を網羅するように、添付の請求の範囲が考慮される。

【第1図】



フロントページの続き

(72) 発明者 ストーン, チャールズ

カナダ国, ブリティッシュ コロンビア
ブイ 6 アール 3 ティー 4, バンクーバー, ハイバリー・ストリート 2775

(72) 発明者 ステック, アルフレッド イー.

カナダ国, ブリティッシュ コロンビア
ブイ 7 ブイ 3 エイチ 7, ウエスト
バンクーバー, ウエストリッジ アベニュ 3956(56) 参考文献
特開 平1-266118 (J P, A)
特開 昭53-26884 (J P, A)
特開 昭62-204255 (J P, A)
特開 昭62-204254 (J P, A)

(58) 調査した分野 (Int. Cl. 7, DB名)

C08F 14/00 - 14/28
C08F 214/00 - 214/28
C08F 8/00 - 8/44
C08L 27/00 - 27/12
B01D 61/00 - 61/42
H01M 8/02